

『本朝二十不孝』論

三 浦 邦 夫

On Saikaku's "Honchō-Nijufukō".

Kunio MURA

『本朝二十不孝』巻二の三「人はしれぬ国の土仏」の、主人公藤助は逆さに釣り揚げられて人油を絞り取られる地獄の責苦にあっていた。ある日、日本からの渡唐の僧が彼の目の前に立った。藤助は右の小指を喰い切り、私は生国勢州鳥羽の湊の者、浮世のならいとして親は憐み子は孝をつくすのが道だが、貧家に生れ育ち、釣針鍛冶の家職を捨て、一度ならず二度までも両親の心に背き、江戸商いの舟乗りとなり、大風にあつてこの島に漂着し、岸の五色の枝・輝く玉石に心奪われ社人の諫言をも聞かず唯一人残ったばかりにこの憂目にあっている。ここは「額綱城」として懼き国なれば、命をとられ給ふな」と心の程を左の袂に書きつけて告げ知らせた。この僧は帰朝後鳥羽湊に立ち寄り、その責苦の光景を物語ったが、里人は「藤助が身の難儀は皆親の言葉を背きし罰ならん」と思いやったのだった。

この親不孝譚が額綱城説話を素材に構想されていることは明瞭である。⁽¹⁾ といふことは、この親不孝譚から額綱城説話を取り除いたとすれば、そのあとには貧家に生育した藤助が「浮世習にて親は憐み子は孝を竭」の道に叛して「家職を捨て」両親の意見に背き江戸商船の「上乘」になった「罰」で「身の難儀」にあった、という不孝譚が残ることになる。このように依拠した素材を除去することによって、この親不孝譚はその構造を露呈する。ところで、西鶴は『二十不孝』序で「不孝の輩眼前に其罪を顕はす」と記しているが、とすれば額綱城説話は藤助の「罰」を眼前に顕わすために取り込まれた「身の難儀」の具象化を意図したものであったろう。

また、巻三の三「心をのまるゝ蛇の形」は、山家がよいが世渡りの武太夫が、ある時川淵に年々流れ込んでかたまった漆を発見し、欲心のあまり水中に竜の

細工を沈め、親の意見に背き、一子武助に「我がごとく取りならへ」と川に入るが、この竜に精が入って親子とも川の藻屑となり、家は漆押領の科で闕所、妻は人の門に立つ乞食と成ったが「姑につらく当りし者として、すたり行水をもやらず、程なく」飢死した話で、細工物の竜に親子とも川の藻屑となるのは武太夫が親の意見に「仇をなし」た罪の眼前の顕われである。森山重雄氏はこの親不孝譚の原型として、川底に溜った朱を独占しようとする自からしつらえた竜細工に吞み込まれてしまうという民話「赤淵の朱」を指摘しておられるが、この民話に拠った部分を前と同様に除去すれば、押領した漆の利得で出来分限（俄成金）となった武太夫が「昔を忘れ、時得て、我まを振舞い、」「猶欲心深きたくみ」に親の意見にも拘らず「却て親に仇をなし」た結果の親不孝譚としてこの話は浮び上ってくる。だが、依拠した説話・民話の部分を除去することは、あくまでも『二十不孝』で西鶴が△不孝▽をいかにみていたかを露呈させるための一時的試行的操作に過ぎないのであって、『二十不孝』各々の親不孝譚が原因結果の形をとり、親不孝譚として最つとも効果の意図された結果に説話・民話をその具体的形象に取り込んだことには西鶴の創作の方法が秘められあるはずであり、除去した部分は本来的には残った部分と一体の有機的なものであろう。しかしまたこの除去の操作によって、西鶴が『二十不孝』で△不孝▽をどのように考えていたのかというその図式の露呈してくるという効用のあることも確実なのである。したがって、除去の操作によって明瞭になる西鶴の△不孝▽の図式を先の二つの親不孝譚をもとにして明確にすることから議論を進めることにしたい。

巻二「人はしれぬ国の土仏」の藤助の親不孝譚は、釣針鍛冶を家職とする貧しい老父にとって「立居の手祐^{たすかり}、鉾^{あしがね}の槌をうたせ、かかる浮世習にて親は憐

み子は孝を竭を道なり」という文脈を前提にもち、この文脈を背景に二親の意見に背いて江戸商船の上乗りを望み「家職を捨て」る藤助の不孝譚が形成されている。巻三「心をのまるゝ蛇の形」の場合は、出来分限の武太夫の、その俄分限ゆえの「我まま」な振舞いが「分限に品々あり。世間にかはらず其身相応の衣類を着て、朝夕も折ふしの魚鳥を味ひ、貧なる親類を取立、下々を憐み、神を祭仏の道を願ひ、親に楽をあたへ他人の義理をかかず、万事直にして富貴なるは天の恵みふかく、人の本意なり。」の文脈が先行することによって、武太夫の俄分限の「我まま」振りが浮き上がってくる。したがって、二人の親不孝譚に先行するこれら文脈は藤助・武太夫の親不孝の在り方を浮彫にし、かつ二人の親不孝の在り方を規定する枠組みなのであって、二人の親不孝譚はこの枠組みである文脈を地として浮き出る図であるという地と図の關係にあるといえようか。この地と図は互に互を浮き出させるという相互作用的機能をしていて、図の親不孝譚は地の文脈によってその不孝の在り方が意味付けられ、地は図によってその妥当性を得ている。だから、地の文脈は何が親不孝かという△不孝△に対する西鶴の認識の視座であり、また逆にこの視座はいかなる在り方が孝であるかの△孝△に対する彼の図式でもある。

この図式は、先述の二つの親不孝譚によっていえば、それは地の文脈に表われた「世間にかはらず、其身相応」に「万事直」にあること、「家職」を守ることであり、それが「人の本意」であることにおいて孝であるという認識である。とすれば『二十不孝』序の

雪中の筭、八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり、世に天性の外祈らずとも、夫／＼の家業をなし禄を以て万物を調べ、教を尽せる人、常也。

の記述はこの図式的集約的な表現としての意味をもつことになる。つまり、「雪中の筭・鯉魚」という△二十四孝の孝概念△の否定にもとづいて「夫／＼の家業」をなすという家業（家職）意識をもつことが孝であり「常」なる在り方であると西鶴は見なしているわけであって、地の文脈によっていえば、それは「世間にかはらず」ということであるだろう。例えば、巻一の一「今の都も世は借物」で、遊蕩の末に「死一倍」の契約で借りた千両の返済に親の毒殺を計略し、自から毒味して果てる主人公笹六の親不孝の図は、「爰にて何をしたらばとて渡り兼ねるか」という繁栄の今の都の身過ぎの様々を叙述して「徒居なく手足動かせば、人並に世は渡るべし」という文脈を地にして形成されている。「世間にかはらず」とは「人並」であることの在り方であり、最っとも日常的な生活の在り方であろう。巻三「心をのまるゝ蛇の形」で「世間にかはらず」

在ることを「人の本意」と西鶴のいう意図は日常的な在り方が規範であるとする意識である。そして、この規範意識は△二十四孝の孝概念△を否定する一方で、「親は憐み子は孝を竭」在り方を「浮世習」として、すなわち、世間の日常的習慣性として所与的規範であることによって孝という倫理意識として西鶴には意識されていたと解することができよう。したがって、それは町人が世間で生きることの最っとも一般的な在り方であると同時にその根底的な原理でもあったといえよう。西鶴はこの図式によって『二十不孝』の人間たちを視るのである。

註(1) 額綱城説話は『今昔物語』巻十一「慈覚大師互唐伝三頭密法帰来語」、『宇治拾遺物語』巻十三「慈覚大師入額綱城行事」、『打聞集』十八「慈覚大師入唐問事」等に見えるが、岩波文庫本『本朝二十不孝』補註では『宇治拾遺物語』に依拠の立場をとっている。

(2) 『西鶴の世界』——歪められた青年の群——「本朝二十不孝」 森山重雄著。

二

『二十不孝』での親不孝者たちは常なるものである最っとも日常的な在り方からの逸脱者たちである。

石川五右衛門が釜煮えの熱さを「七歳になる子に払ひ」彼の足下に敷いたのは、「己が農作を外に、無用の武芸をたしなみ」親の意見に「却て怨をなし、現在の親に縄をかけ、それにて思ひしれ」と言いすて「盗人の司」になった果ての行為であった（巻二の一「我と身をこがす金が淵」）。五右衛門の親不孝の端緒は「己が農作を外に、無用の武芸をたしなみ」親の意見に背いたところにある。ここでの常なるものは「己が農作」であり、それを「外に」することは常なるものの埒を自から逸脱してゆくことであって、さらにこの逸脱が「武芸をたしなむ」という形をとった時に西鶴はそれを「無用」という。ところで『二十不孝』には「無用」なるものに身をなし、それに耽る人間のいかに多いことか。世にあるほどの言葉を尽しての「異見を聞けず」移気ゆえの「無用の道心」に「あたらず財宝をなく」し、家名を絶やした男（巻一の四「慰改て咄の点取」）。世間に知れた「歴々の町人」に似合わざる相撲を取るといふ「無用の達者」ゆえに骨を砕き片輪になった男（巻五の三「無用の力自慢」）。その他に、無用の大酒を唯一つの生きがい飲む男（巻五の二「八人の隠々講」）、無用の「ぬけ鞘持ての嘩咄すき」の男（巻五の四「ふるき都を立出て雨」）。彼等は当然身をなすべきはずの各々の家職の埒外に身をなし耽けるのである。家

職は、例えば、「我と身をこがす釜が淵」では父石川五太夫の「あまたの人馬をかかへ、物つくりして世の中の秋にあひ、春ををく」る業が当然子五右衛門の「己が農作」としてある在り方であり、また「人はしれぬ国の土仏」では老父の釣針鍛冶の業の「立居の手祐」に「鉦の槌をう」つことが藤助のなすべき「浮世習」である在り方である。父の家業が必然的に己の家職であることとして彼等に前提されているわけであるから、家職はあくまでも彼等にとって先天的な所与としてある。だから、彼等が常なるものの埒外に身をなした耽溺することとは彼等の所与性からの逸脱であり、彼等に属していない他の所与的在り方に身をなすことになるはずである。しかし、身分が制度として固定した現実においては彼等が他の存在者になることは不可能であったから、その結果、盗人に、乞食に、非人の妻に、道心者にとりて脱落的在り方に身をなすことであった。所与からの逸脱は世間からの脱落を意味したのである。それ故に、彼等の在り方は「無用」なのである。彼等が自己の属する所与的在り方に身をなす存在者である限りにおいて、彼等の行為は「用」すなわちその所与にあって最少限度の有効性をもつといえよう。そして、先天的所与である日常的在り方が世間の規範でもあり、それが「常也」であることは世間の内部に埋没した目立たぬ在り方が本来的姿であるはずである。西鶴の主張する孝とはそのような在り方である。『二十不孝』の人間たちが所与の日常性から逸脱するのは、だから反日常的行為であり、日常性として埋没してある本来的姿に比して、その反日常性ゆえに逆に目に立つ在り方として顕在してくることになるのである。

ところで、西鶴の取りあげた「無用」の具体相、例えば、相撲を取ることで大酒を飲むことなどをその当人は「慰」（巻五の三）、「世のたのしみ」（巻五の二）と言っている。しかし「歴々の町人」の慰みには相撲を取ることよりも「琴棋書画の外に、茶の湯鞠楊弓謡など聞よし」（巻五の三）という在り方は、本来所与に有効ではない慰みが当然所与を損傷しない限度を容認の境線として、所与にふさわしくかつ所与を高揚するという程度においてその価値をもつことを意味している。したがって、その容認の境線を越える慰みは「物ずき」・「物好み」であり、それに執着することは「わる物ずき」（巻五の三）とみなされることになる。「慰改て咄の点取」の「無用の道心」は、「武士の家にては弓馬の芸に疎く、又病者にして勤の成難きを進て衣をきせ、町人は算用おろかに秤目覚えず日記付さへならざるを、迎も商人には思ひもよらず、世を楽に墨染になれ」という世を送る方便に出家し「おもしろや此境界と思ふた斗にして、又の世の仏の道をも心の駒の七次第にしろす、衆生をすすめる基もな

く、布袋腹に齋米を費し、娑婆塞^{ふたけ}」の当時の出家気質の中で、点取りの咄作りの慰みごとと同次元に出家することを発想した結果である。そして、これは慰みから慰みへと移り氣に慰むことに執着耽溺した果てに発心すらが慰みごととして発想せざるをえなくなる慰みごとのもつ「物ずき」「物好み」の在り方である。巻一の三「跡の剝たる煙入長持」の、加賀城下の絹問屋の「形すぐれて一国は沙汰」の娘小鶴が剥けた長持を塗りなおしては縁組みし「十四より煙入しそめ、廿五迄十八所さられた」のは、まさに「男よく姑なく同じ宗の法花にて奇麗なる商売の家に行事」の「物好み」に、「千軒の聞くらべ見定め」願い通りの最初の呉服屋で「半年も立ざるに、此男を嫌ひ初」、次の菊酒屋では「秋口より物かしましとていやがり」、三度目の仕舞屋は「人すくなくにして、算用する内を嫌ひ」さらに四度目の木葉屋では「男に子細もなく身上に云分なければ、隙状取べき事もならねば作病に癪癪疾出し、目を見出し、口に泡を吹手足ふるはせければ、是見て堪忍成がたく、竊に戻すを悦び、親には先の男に嫌う難病ありと跡形もなき告口」という驚くほどの飽くなき「物好み」への執着の末である。西鶴のいう「無用」とは「物ずき」「物好み」への執着耽溺の結果の「わる物ずき」の様態であるといえようである。

そして「無用」は、例えば、無用の相撲で当人が片輪になるという破壊のみならず、家族を破壊に追い込み、ひいては家業そのものを崩壊させてしまうのである。五右衛門の父五太夫は「日比五右衛門に恨みふかき狼藉者」に「子のかはりに此親を死ぬ程切々と」切り呵責まれ、富貴の生業をかえて生死流転の苦しみの深い舟頭に没落し、無用の道心者は二親を「思ひ死」させその財宝のみならず家名をも絶えさせ、小鶴は四人の我が子を見殺しにし「弟亀丸……姉が不義ゆへ……ぜひもなき思ひと成廿三歳にて果ぬ。ふたりの親も世間を耻て宿に取籠り悔み死」し「其後は独り家に残れど、夫になるべき人もなく五十余歳迄有程を皆になし」て大殺しの業の男と共に在所を捨てざるをえなくなるのである。

「無用」という様態で各々の属すべき所与を逸脱することによって親が世間を耻て死ぬという悲劇を招くのは、所与に属することにおいて「用」である日常的在り方が世間の規範を秩序づけていることを逆に意味しているとすれば、親不孝者に対する親の意見は世間の規範からの批判の代理を意味してくる。とすれば親の意見に背いて逸脱してゆくことは世間を逸脱してゆくことであり、結果的には先述したように世間を脱落することではあるはずである。したがって、一個人の逸脱であっても、それは当然世間の規範性を破壊する行為である

ゆえに、悪として世間と衝突し世間の批難を浴び、悪であることにおいて「眼前に其罪を顕はす」という形で逸脱の果ての必然的な没落を導き、同時に所与それ自体の崩壊をも導く必然性をもった現実の姿を指示するのである。

ところで、『二十不孝』にはもう一つの型の逸脱者が描出されている。それは巻一「今の都も世は借物」の笹六の型である。笹六が「死一倍」の借金の返済に父親毒殺を謀ったそもその原因は、「七年此かたに請取し金銀を若女ふたつにつるやし、隠居の貯有に極りし分限なれ共ままならず」という遊蕩の果てであった。そして、ここに今引用した記述の文に先行して西鶴は「いかに若ければとて」と批判的口吻の言葉を冠する。その不孝の淵源は彼の未熟にあったのである。笹六型の親不孝者は他にも『二十不孝』にはいる。巻四の一「善悪の二つ車」の主人公源七・甚七は「遊女狂ひに身を焦し」親の「貯へおかれし金銀、我物を盗つかひ、所の長者といはれしも家次第にさびて十年余りに浅ましく成ぬ。親仁、若盛にいろ／＼の堪難を碎き、今老の入前かかる身なし。朝夕も烟絶々に」なしてしまふのである。この二人が遊女に金銀を蕩尽するのは「親にかかりなれば、浮世の持をしらず」「親仁、若盛にいろ／＼の堪難を碎」いたことを知らないことに由来する。彼等は未熟なのである。そして、彼等の未熟は、笹六も含めて「浮世の持をしらず」親の「若盛」に碎いた艱難を知らないという世間への無自覚なのであって、それは親の艱難に無自覚であることを通じて「浮世の持をしらず」との形で表われた彼等の世間の日常性に対する認識の欠如を意味している。また巻四の二「枕に残す筆の先」はこうである。若い息子夫婦に身代を譲り渡した舟問屋の勝手元の切り盛りは「いまだ振袖の身の」若い嫁には「下々も我まま出して、台所そこ／＼に、始末の事も心もとなく」無理であった。当然主婦権は「舟問屋の勝手は是で持た、かみ様の御飯貝」と噂されるしつかり者の母親が依然として握ることになる。長い部屋住みの気苦労に厭き果て、比丘尼寺に駆け込んだ嫁の跡を追って息子も家出し「夫婦は二世と戯れ」る。母親は「其日より、湯水も飲ず十九日目に」はかなくなった後、息子夫婦は「むかしのごとく世間を勤め」る一年後、母親の「世を見るに、煙としりて姑となる、人の心のおそろしさに、艶しき狼を恐れる。子のかはゆさあまりておしからぬ身なれど、千とせもちらぬ花煙子に命をまいらす」という書き置きが母の枕から発見された。西鶴は「是を聞つたへ、人のつき合かけて、おのづから取こもりてありしが、夫婦さし違て果ける」と結んでいる。ここに描かれた若い嫁の姿と巻五の一「胸こそ隔れ此盆前」の若い嫁とは対照的である。巻五の一の嫁は、夫達の渡海の留守に、掛乞の押しかけに

難儀し歎く母親をよそに、色科つくり盆踊りの稽古に余念なく、これを意見する母親に雪路を投げつける娘小ぎんと対照的に、櫛、簪、帯を代に物を求めて孝養を尽し、唯一人残つてこの様子をつぶさに見て感涙した掛乞に、その有金を進呈させるほどである。巻四の二の悲劇の萌芽は、森山重雄氏も指摘するよう〔1〕に、町人の内儀としての母親の賢明さと若い嫁の、「始末の事も心もとなく」あるという巻五の一の嫁とは対照的な未熟さにある。さらに「親の事は外になし」て比丘尼寺に跡を追った息子の愚かさをこれにつけ加えることができよう。若い息子夫婦は未熟と愚かさから「さし違て果てねばならない。しかしこの惨事はその未熟と愚かさを「聞つたへ、人のつき合かけ」た結果でもあったことに留意せねばならない。姑の町人の内儀としての賢さは経験が生み出した賢さであろう。とすれば未熟は未経験ということに帰着するかもしれない。だが巻四の二の嫁が十九で巻五の一の孝行な嫁が十六であるという記述からすれば、年令あるいは嫁としての経験を通して得るものであるよりも、嫁の在り方として要請される当為であって、その意味で未熟とは世間の規範に対する認識の欠如を指示しているといえる。この欠如が世間からの放逐―「人のつき合かけ」を生み出すのである。その意味で未熟は世間からの逸脱であるとみることができよう。そしてその好例を巻五の一の兄に家を放逐される小ぎんに求めることができるのである。小ぎんの在り方はまさに世間から放逐されるにふさわしい逸脱として、嫁の孝養とは対照的に描かれ強調されているのである。子が親の艱難を知り、嫁が姑の町人の内儀としての在り方を知るといことは、子や嫁にとって親や姑が世間の貌をもっていることを示している。親や姑の世間の貌を通して子や嫁は「浮世の持を知」り、町人の内儀の賢さを自得していくのであって、その意味では親や姑は世間というものの雛型であり、その故に世間の在り方を教える手本なのである。子や嫁はその雛型に自己をはめ込んでいくことによって親や姑の属する世界に一体のものとして所属していくことになる。西鶴は「……教を尽せる人、常世」(序)と言ったが、その「教」とは親や姑の「教」であり、ひいては世間の「教」であって『二十四孝の孝概念』ではなかったのである。「教」が親や姑の「教」であることは親が「浮世の持」のためになめた艱難の堆積から得た知恵であってみれば、それはその人間の生の痕跡を宿したものであるだろう。

ともかく『二十不孝』の主人公たちは彼等の所与の日常性を「無用」と未熟との状態で逸脱していった人間たちである。その意味で逸脱は『二十不孝』の基本的パターンといってよいであろう。

カルタ博奕に足を踏み入れ、その魅惑にみだり破滅に至る堺の仕舞屋八五郎の場合（巻三の三「先斗に置いて来た男」）でも、楠木分限の多い堺が「よろづに古風残りて、物ごとうちばにかまへ、律義を本として、人みな花車に世智かしこく、灸箸にて目をつくごとく、其技しき息も鼻もさせぬ所」という日常性を背景に置くことによって、博奕に足を踏み入れる以前の八五郎の「不断の仕業、塩肴も目に掛けて直段をし、計芋も百を何程と数読て置、夢にも十露盤を忘れず、銭溜る分別ばかりして……世帯もちかたむる鑑にもなりぬべき人」と噂された在り方は堺の日常性が生み出した典型として浮き出てくる。しかし、「銭溜る分別」ゆえに「今時、何商をしても一倍になる事はより外になし、長崎へ銀を下すは長々の氣遣なり。これは一思ひの早業」と一攫千金の博奕に身をかけたことは、「物ごとうちばにかまへ、律義を本」とする堺町人の日常性を逸脱した行為に他ならない。そして「銭溜る」には「かるた大明神を祈るが近道」と断言する八五郎の顔つきを「心実からの良つき」と叙述する西鶴の目には「灸箸にて目をつくごとく」せわしい堺町人の日常性が「銭溜る分別ばかり」に凝固してしまつた時に、日常性の常軌を逸して「一思ひの早業」にのめり込んで行かざるを得ない人間の、畸形児のごとく、その日常性からうまれ落ちる事態が映つていたことを物語っている。

註(1) 『西鶴の世界』—歪められた青年の群—「本朝二十不孝」 森山重雄 著。

三

所属する世界の日常性を逸脱した果てに彼等逸脱者に残されてあるのは「眼前に其罪」を蒙ることだけであると西鶴はいう。それは、先述したように、逸脱がその行為主体者の所属する世界すなわち世間の規範を破壊してしまうゆえに悪であり罪であるからであらう。巻四「枕に残す筆の先」の息子夫婦が「人のつき合かけて」自害し果てた結果や、巻一の三「跡の剝たる煙入長持」の小鶴が「物好み」の末に肉親を悔み死させ、あげくに一日暮しに「髪油を売ど、聞伝て是をかはさず、けふをおくりかねて」木刀伊のごとく死に果てたことなどがそれを明らかに示している。しかし、世間からの放逐という懲悪の觀念とともにもう一つの懲悪觀念が『二十不孝』にはある。

文太左衛門は、夏の夜団扇であおがせていた七才の妹を「手先に力なくて、団の風もまだるきとて首筋逆手に取つて抛しに、庭なる碓」にあって息絶えさせ、主ある女に通い、意見する母親を蹴立てて腰抜けにし、「父親に世をかせ

がせ：親に、世は露の命とねめまは」す有様である。残る妹は「親達のためなれば」と進んで島原に身を置いたその二十両を盗み出し行方をくらます。両親は寺近くの野原で「舌喰切て骸は山犬の物」となってしまう。遊蕩に「一步残らず時散し」立退く途中、文太左衛門は「二人の親の最後所になりて、足すくみ、様々に身をもだへしに眼暗て倒」れるが、そこに「二親の亡骸を喰し狼又出て、終夜鬨喰：其骨の節々迄を余多の狼くはへて、狼谷の海道ばたに又人形を並置て、文太左衛門が耻を曝させ」た巻一の二「大節季に無い袖の雨」において、西鶴は「忽ちに天是を罰し給ふ」と結言している。文太左衛門の悪を罰したのは天であり、狼はその代行者として文太左衛門の「耻を曝させ」たのである。また、幼少から養育された慈愛の深い継母を追い出すため、母子の間に不義を詐術し、物陰から父親に見せかけて真実な妻を離別させた万太郎（巻四の三「木陰の袖口」）の罪が「悪事千里：誰いふ共なく所に沙汰して諸人憎みたて、身の置どころもなく上方へ立のきしに、七里半の道中にて時ならぬ大雷神鳴おちたるとも覚えず行うちに、万太郎を乗たる馬ばかり残」る結末や、灯油を好む子が火勢の中で大人の口吻で、虫出し神鳴りの響き渡る夕暮れに、油売りを殺害し八十両の金を奪ったのは我が父と語り出し、父は自害しその子は夕暮れ時に行方知れずとなる、巻三の四「当社に案内申程おかし」なども、「西夢父をうちしかば、天雷来りて、その身をさくとかや」（『類船集』三）のごとく、悪人の死骸を雷が持ち去るという俗信や、泥棒夫婦が六部を殺して金銭を奪い、後に生れた子が「六部を殺したような晩だ」と口に出す民話「こんな晩」を原型にもつことによって自然の超越的なものの摂理による懲悪の觀念が打ち出されている。西鶴のいう天はそうした自然の摂理を指しての言葉である。『二十不孝』の逸脱者はそのことごとくが親の意見に背き親に仇をなす人間たちである。西鶴はいう。「我子さへ親のままならず」と。巻二の二「旅行の暮の僧にて候」の、息も絶え絶えの旅僧を我が家に案内しながら、父親にこれを殺害させ金を奪はせた小吟は姿自慢よりの男選びに、意見する親に「此富貴は我が智恵付て箇様に成ける」といふ出し「かつて親のままにもならず」、親は我が子ながらもてあますのである。小吟の悪行はここから始まる。また、文太左衛門の悪行に世間の人々が天命しらずと指さして深く憎めども、親のままにもならぬ文太左衛門であつてみれば彼等にはなおさら「ままならぬ存在なのである。親にとつても世間にとつてもままならぬ悪は「人の心のおそろしさに艶しき狼を恐れる」と西鶴にいはいはしむる程のデモニッシュな力をもつ。そしてままならぬ悪ゆえに、文太左衛門や小吟のように、時に悪は繰り返され

り返し幾度となく積み重ねられて描かれることによって、そのデモニーニッシュな力が強調されるのである。だからこそ悪は世間の制裁を超越した力によって滅亡されなければならない。なぜなら「ままならぬ」とは世間の規律による制裁を越えて、その及びえないことであることを意味している。そしてその制裁の及びえない場合それに代行する力(權威)を求めなければならぬからである。

だから「天の咎を遁るべからず」と序でいい、各説話の文中で「天」「天命」と西鶴がいう「天」は自然の摂理という超越的な絶対的力に他ならない。逸脱者の末路が、例えば「文太左衛門が耻を曝させける」、「男も女も眼前に耻をさらして」(巻三の二)、「見る人親の耻なり」(巻三の三)のように「耻をさらす」ということは、耻が逸脱者の所属世界において他との比較における劣位意識を示すものであるとするならば、逸脱者はその世間の劣位者としての烙印を押されたことを意味する。「耻をさらす」の「さらす」が自然の力によってその形質が露呈されるという意味をもつことは逸脱者に劣位者の烙印を押す者がその所属世界であるよりもそれを超越して摂理する權威であることを示唆している。そしてこの權威によって逸脱者の行為が所属世界の集団の眼前に呈示されなければならない悪であることを示している。序に「眼前に其罪を顕はす」という記述は逸脱者が劣位者として所属集団の眼前にさらされることを意味している。

ところで、『二十不孝』の懲悪観については仏教的因果応報観によるとする見解が通説的である。事実、親は子の不孝に因果を口にする。五右衛門の父親は「人間先生の因果をしらず」といい、外聞ゆえの遺言状を盾にその内容通りの金の譲渡を迫る弟たちを目前に長兄は「大方ならぬ因果なり」と悲歎し、異常受胎に娘四人を失った親は「いかなる因果ぞ」ともだえ(巻三の一)るのである。そして思わず彼等の口をついて出る「因果」は「先生にいか成縁縁を結び、親となり子となり、今の難儀にあふ」(巻三の一)・「遠くは過去慳貪の果なる事を思ひ、近くは求不得苦を觀じ」という仏教的因果觀念に支えられていることは確かである。しかし、悪行の文太左衛門を「同じ家に置いて、ない物くはふといひたいまゝに月日をかさね」る親の様子を「因果は親子の中」といふ、物好みに離縁されては帰る娘をその度ごとに望む家に嫁がせる親の姿を「親の因果にて捨がたく」と西鶴が記す「因果」に今少し注目してもよさそうである。そこには子の悪行に苦しみながらも子に対する骨肉の情愛が否定すべくもなくこめられている。それだからこそ「枕に残す筆の先」の母親は「子のかはゆきあまりておしからぬ身なれば」と書き残すのである。『二十不孝』に

において「因果」は常に親の側にあり親の口にする言葉である。親に背反する我が子が自分にまゝならなければならない程、所属世界の劣位者として烙印されればされる程、増してゆく骨肉の情愛にいかんともなしえない歎息が「因果」であった。それは仏教的因果觀念などという割り切れた概念ではありえない親としての根源から発した情念である。また、「物には因果あり」という巻三「当社の案内申程おかし」は、油呑みの子をもうけたのはかって油売りを殺害したゆえであり、またその子によってこの旧悪が暴露されるのは「因果」であるが、先述のようにこの叙述が暴露した子が「暮天に行方見えず」なる「今に不思議の晴ざる」結末によって、その子が父親の恥をさらす「天」の代行者であることを暗示しているように、小吟の父親が旅僧殺害の日の七年目に処刑される「因果」も民話「こんな晩」を原型にもつことで仏教的因果観ではありえなくなっているのである。

註(1) 岩波文庫『本朝二十不孝』補註。

(2) 『西鶴の世界』―歪められた青年の群―「本朝二十不孝」 森山重雄著。

(3) 『文学理論の研究』(岩波)―「羞恥の芸術」作田啓一、多田道太郎。

(4) 岩波文庫『本朝二十不孝』解説、『講座日本文学7近世編1』(三省堂)―「西鶴」東明雅。

四

さて、以上に考察した懲悪観から『二十不孝』が孝道奨励の理を談じた作品であると結論づけることは少しく性急に過ぎるに思う。例を「因果」の言葉にとれば、この言葉は西鶴の仏教的因果応報観を示すものであるよりも、親の子による現実の苦悩と骨肉の情愛のいかんともなしえない情念の発動にもとづくものであった。それを西鶴は「因果」の言葉に託したに止まる。またそうした言葉で表現することが最つともよく『二十不孝』の親達の心情を読者に共感共有させうることを知っている西鶴の叙述の在り方でもある。その意味で「因果」の用語は『二十不孝』の叙述の在り方と深く関与している。この「因果」に今みたように『二十不孝』の懲悪観はその叙述の在り方と関与し合うもののである。『二十不孝』の叙述の意図はそこから問われなければならないと思う。

『二十不孝』の叙述の在り方は巻一「今の都も世は借物」の、「死一倍」の借金をする事になった笹六が貸主の「かり手の年の程を見に」手代を遣わす

というので「美男を俄に逆襲にして身を見ざるしうなし、今年廿六なるを三十一」になりますと知れて有年をまざまざと五つ隠されし、世上のならひにて年若に云を悦びしにさりとは不思議晴ざりし」という場面の記述によく現われているようである。親の命を抵当にその死とともに二倍にして返済するという「死一倍」の借金が貸主にとっては親の死が目前に確実であつてはじめて金融業としての利の確実さが成立する。笹六の擬装はしたがって「わたくしは年よられましての子なり。もはや親仁は七十に程ちかし」という思惑から着想されたものである。西鶴は「死一倍」の仕組みを前提にこの擬装を笹六にとらせたわけである。だが、叙述主体としての西鶴は笹六の擬装行為に当面して「世上のならひにて年若に云を悦びしに、さりとは不思議晴ざりし。」という擬装の目撃者の位置に身を転ずる。また、毒の試みして「見出す眼に血筋引髪縮みあがり骸体常見し五つ嵩程になりて」果てた笹六の有様に「人々奇異の思ひをなしける。」とする記述も笹六の身体が「常見し五つ嵩程」になったのは明らかに五つ年を擬装したという行為がその前提としてあつた結果なのである。にもかゝらず「奇異の思ひ」をする目撃者の場に西鶴は同じように移行する。「世上のならひ」とは出来事を目撃者が眼前の出来事に直面してその意味を求めようとする解釈の一般的依り拠であらう、叙述主体としての西鶴は眼前の出来事に直面した一般の目撃者の場に立ち、その目撃者の一般的日常的判断の基準である「世上のならひ」を通して「不思議晴ざりし」、「奇異の思ひをなしける」と記述するのである。そして、この「世上のならひ」は「二十不孝」の各々の叙述において次のように表われてくる。文太左衛門の妹が身を売って得た二十兩を聞つけ、彼のあばら家に借金請求に押し寄せる「商人のならひ」、若い嫁の比丘尼寺にかけ込んだのは町人の内儀として「あしからぬ姑を嫉む」煙の習ひ」というように。そして、隠居した母親が台所に「幾度となく見舞て、末々迄氣を付」けるのも若い嫁の未熟さゆえに「下々も我まゝ出して」くるという「ならひ」のためであり、しかもそれは畢竟「女心は愚にして、嫌子に家を渡す事いつ迄も惜しみぬ」という姑のならひによるものでもあつた。また、異常懷妊に二人の娘を次々に失いながら「世上に住むならひとして、次第に跡を忘れ」なお三番目の娘に入塾を望むのも親のならひである。無我無分別の発心も、当時の出家形氣というならひの文脈の中で描かれることによつて。その「無用」の意図が生きてくる。「因果」を口にし心に叫ぶ親の叙述はそうした「世のならひ」によつた在り方を示唆するのである。

こうした叙述の在り方は『二十不孝』の序に記す「諸国見聞するに、不孝の

輩眼前に其罪を顯はす、是を梓にちりばめ」(傍点筆者)たという諸国咄的性格に由来していよう。事実、例えば、無用の道心の末路の結言の「是競なき不孝坊といへり」の記述は不孝坊の咄を聞いた者の立場からなされていることはいうまでもあるまい。こうした例が、

聞人涙にくれて此藤助が身の難儀は皆親の言葉を背きし罰ならんとおもひやりぬ(巻二の三)

子細聞つたへて、弟三人の大悪をにくみ、兄の心底おしはかりて、見ぬ人迄も袖を滴しける(巻二の四)

見る人親の耻なりと憎み哀と云者なし(巻三の三)

是を聞つたへ、人のつき会かけて、おのづから取こもりてありしが、夫婦さし違て果ける(巻四の二)

時ならぬ大雷神鳴おちたるとも覺えず行うち、万太郎を乗たる馬ばかり残りて、口引おとこ立帰り、此ふしぎをかたりける(巻四の三)

右のように、出来事を目撃し、それを聞いた人の咄として叙述されている。これは明らかに西鶴が咄の聞き手となり、さらにその咄の語り手となって報告するという伝達の形式をとっていることを示している。「二十不孝」の「眼前に其罪」をさらす描写が説話・民話を原型にもつのはそのためである。では彼は単に聞いた咄の忠実な再現を心がける伝達者であるかといえそうではない。

先に考察した八孝の図式を媒体にして伝達する、それが彼の叙述の在り方であるといえるようである。そして、この図式が『二十四孝の孝概念』を拒否し日常的なものとして捉えられた限りにおいて、西鶴のこの図式に対する主体性が存している。だが、こうした把握が彼の主体的な認識として主張されているよりも最つと一般的世間的なものととして『二十不孝』では呈示されているのである。すなわち、孝が当為でありながら常なるものである日常性として、それ故に「浮世習」として主張され、「教」としての当為が形而上的概念であるよりも日々の生活体験の中からの実感的に把握された知恵としての意味をもつものとして認識されているのである。このことは孝に対する西鶴の主体的認識が不孝咄を語り聞く人間の場に、すなわち「世上のならひ」の場という没主体的認識の形態に滑り込んでその形態を装うという在り方を意味していよう。「天」に意味づけられた自然の摂理という觀念もしたがってさうした没主体的「ならひ」の在り方による叙述の在り方が現出させたものとみるべきであらう。

註(1)『西鶴諸国はなし』の「世間の広き事国々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」(序)の記述、『懐硯』の「しらぬ山しらぬ海も旅こそ師

匠なれと、我朝／＼わらんぢのあたらしきをたのみ：或はおそろしく或はおかしく或は心にとまる人の咄しを、くきみぢかき筆して旅せぬ人にと如左」(序)の記述は西鶴の伝達者の姿態を物語っている。

『二十不孝』序の記述は「諸国はなし」と同線上にあり『懐硯』へと延長して行く線上にあるのは確実である。特に自からを旅人に擬した『懐硯』の序は『二十不孝』の直後の刊であることで『二十不孝』の「ならひ」による叙述の在り方を考える上に示唆的である。

五

この叙述の在り方は『二十不孝』の叙述の意図「此常の人稀にして悪人多し：天の咎を通るべからず、其例は諸国見聞するに不孝の輩眼前に其罪を顕はす、是を梓にちりばめ孝にすむる一助ならんかし」(序)と分離不可のものである。西鶴は「此常の人稀にして悪人多し」という。先に、西鶴にとっては孝が先天的所与に所属する限りにおいて常なるもの、日常性として本来的に埋没してあることと見なすことによって不孝という反日常的在り方が悪として目に立つものとして顕在してくることを指摘したが、序の「悪人多し」とはそうした顕在化に基づく記述であることを物語っている。そしてこの顕在化は「常の人稀」という本来的に埋没したものと捉えた孝をさらに稀薄化し欠如化することによって支えられているのである。そこに顕在化した悪は「眼前に其罪を顕はす」奇異なる事態として読者の世間咄の世界と同次元に属して行くのである。「世上のならひ」に位置して叙述する姿勢がその結果生じてくることになる。この『二十不孝』序の記述は西鶴が読者を意識に置き、読者の慰みになるという咄の余地を知った発想を示唆するのである。西鶴の遺稿『西鶴名残の友』に附した北条団水の序に「諸国の雑譚、例の狂言をしるせり」という記述がある。この作品は古今俳人の逸話および俳席における雑談集の趣を呈しているが、「事実によると見せかけて、いつのまにか落語めいた笑ひに読者をみちびいて」いく。咄が仮構されるのである。団水が「狂言」と序にいうのはそうした西鶴の叙述の在り方を指した言葉に他ならない。都の錦が『元禄太平記』において、京の本屋の口を借りて「抑西鶴其身文盲にして、学問の徳もなく、出るにまかせて安房口を尽し：野暮をこかして丸裸にする方便数多なれば」(巻二)という西鶴批難の文章は、かえって理を談ずるという発想によるのではない。「安房口を尽」すことであり「方便」であること、団水のいう「狂言」であることが西鶴の叙述の基本的在り方であることを明らかにして

れるのである。西鶴の叙述する意識には咄と「狂言」とが分ちがたい一体のもとして結合している。柳田国男は「平凡単調でない、或人の心の働きが、物の言ひやうに現はれて聴く者を動かすこと」すなわち「狂言綺語」の語り口が口承文芸の特質なのだ⁽²⁾と指摘している。西鶴の叙述の在り方には柳田のいう「狂言綺語」を基底にしたものがあるといえるのである。なぜなら、西鶴が書く行為の対象を読者に置いたことには読む者を動かすものの書きようを意識していたことを含んでいるからである。そこから目撃者、聞き手の場に立つ『二十不孝』の叙述の在り方が生じてきているわけである。こうした目撃者、聞き手にとって「眼前に其罪を顕はす」諸国の不孝咄は世間咄である。「世間」が「日本の俗語では、我土地でない処、自分たちの属しない群を意味している。」⁽³⁾とすればまさに『二十不孝』の諸国咄の性格は「世間咄」の性格なのである。しかし、西鶴が「世間咄」の「世間」に孝が日常の家業の在り方を保守することにおいて常なるものであるという図式を枠組みにしたことは「自分たちの属しない」世界に彼等の最つとも日常的な「ならひ」——当為としての規範性を滑り込ませたことに『二十不孝』の叙述の在り方が決定されたといった方が適当であろう。それ故に「狂言綺語」として読者を動かす効果と同時に読者の日常生活に卑近な「世間咄」としての「眼前に其罪を顕はす」咄が読者の心の内部で日常生活の教訓的雛型に変貌していく作用をもたらすのである。諸国の不孝譚が「孝にすむる一助ならんかし」という序の記述はそうした西鶴の『二十不孝』の叙述の発想に基づくものであるといつてよいようである。

註(1) 『定本西鶴全集』第九巻解説(陣峻康隆)。

(2) 『定本柳田国男集』第六巻——「口承文芸史考」ニ綺語。

(3) 右同十六八昔話と伝説と神話。